

広島大学学術情報リポジトリ  
Hiroshima University Institutional Repository

Title	大晦日から初春へ、そのイメージーションの転換
Author(s)	武村, 昌於
Citation	児童の言語生態研究 , 18 : 66 - 75
Issue Date	2018-10-27
DOI	
Self DOI	
URL	<a href="https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046611">https://ir.lib.hiroshima-u.ac.jp/00046611</a>
Right	
Relation	



## 大晦日から初春へ、そのイメージネーションの転換

教材

谷内六郎画

『遠い除夜の鐘』

『初日の出』

民話朗読

『大晦日の火』

武村昌 於

## 授業のポイント

大晦日から初春へ意識が転換することによって、大晦日も正月も一年のうちで最も「特別な日」となる。その「特別な日」とする意識は、時間軸の転換によるイメージネーションそのものの転換であることを見届ける。

## 1. はじめに

今号の特別寄稿「年中行事」という、子ども会活動の意味を求めて」の中で、上原輝男先生は、

「年中行事の基本姿勢は、全てと云ってはいかに、神仏が必ず訪れて、人々に祝福を与えて去って行く図式だといえるのだから、もしそれに異変があると、私どもの生活はたちまちにして、混乱し、不幸となるのである。私たちが日々穏やかでありたい。平和で

ありたいと願うのは、基本的に年中行事が順調であることが、必要条件であることをしっかり考えねばならない。

物事が順序よく運ばれて次々と片付いて行く時、人々は心にリズムを感じとることができると述べているが、その年中行事の中でも、とりわけ大晦日と初春（正月）は、現代人にとって基本姿勢が薄れたとは言え、その「終わり」と「始まり」の意識は、無意識の裡に、また潜在意識として、日本人の心の中に連綿として受け継がれていると思われる。その「構え」や「感情」があるからこそ、我々は、大晦日や正月を「特別な日」として意識するのである。この「特別な日」の意識は、

二年生の子どもであっても例外ではない。

今回の授業で用いる、画家谷内六郎氏の『遠い除夜の鐘』の絵の添え書きには、「遠くのお寺からひびいて来る除夜の鐘、凍てつく

星空を渡ってひびいて来る鐘に『不思議な新年』（『』は編集部）という感じとつた幼い日、ねむたい目をこすり、雨戸に耳をつけるようにしてきいた鐘の音を思い出すのです。」

と述べているが、響いて来る除夜の鐘がイメージネーションを起こす「装置」となって、新年を迎える契機となっている。しかも、その新年は「特別な」感覚を伴うだけに、なおさら「不思議」さを増幅している。否、逆かもしれない。「不思議」であるが故に「特別な」なのかもしれない。

大晦日と正月は、歳の「節目」を表すだけでなく、やはり「よみがえり」（例えば、新年に禊をし、若水を汲んで供えるなど）のイメージを伴うからこそ、「不思議」であり、「特別」であるに違いない。従って、大晦日を単に一年の「区切り」とするイメージではなく、イメージネーションによって正月へと「転換」していき、またそれが、年ごとに

「円環」するイメージとして繰り返されることとなる。このような大晦日から正月にかけてのイメージの「転換」を、二年生の子どもたちがどのように意識し、また、そのようなイメージの中で、子どもたちがどのように育ちつつあるのかを見届けたのである。

今回、授業で用いた教材は、物語文ではなく、谷内六郎氏の絵である。

絵①『遠い除夜の鐘』（闇を背景に右側にお坊さんが鐘を突いている。その鐘の音が波紋のように半円で五重に広がり、波紋の中には羽つき、カルタ、凧揚げ、獅子舞等の様子が散りばめられている。絵の左下には、姉が後ろ向きでまたその横では弟がこちら向きになって耳をそばだてて聞いている）

絵②『初日の出』（海の間こうから大きな初日の出が上がり、その日の出の光が海にゆらゆら輝いている。手前の磯の岩場の上には、大人の半纏を羽織った姉弟が、お互いに嬉しそうに向かい合っている）

## 2. 指導案（抜粋）

(1) 日 時 平成21年12月28日

午前8時30分～9時30分

(2) 児童 静岡県伊豆の国市立大仁北小

学校

第2学年 亀山貴洋子学級

男子21名 女子12名 計33名

(3) 領域 構え・感情

(4) 授業テーマ 大晦日から初春へ、その

イメージの転換

(5) テーマ設定の理由

教材観・指導観

「大歳の火」(本時では「大晦日の火」として朗読)、これには類話がいくつもあるが、大晦日の晩に火種を絶やしてしまった嫁が火種をもらう代わりに棺桶を預かり、翌朝、死骸は黄金に変わっていた。それは、死体が黄金に変化するという大転換のイメージ運動である。この大転換は、大晦日から初春へとという大転換のイメージと重なっている。これは、「笠地蔵」においても同じであって、爺と婆は貧しいままの年越しをして寝るところが夜中にたくさんの年越しの品々を得るという大転換が訪れる。昼間、雪の中でかぶせてもらった笠のお返しを地蔵たちがしたのである。どの話においても、大晦日の晩に出会った者、訪れた者たちは、この世の者ではなかったということであり、これら異界から

の訪問者によって常ならざる時空、聖なる時空が出現したのである。

一月一日は、特別な日である。世界の創造は年ごとに更新されるが、その始まりの日である。そこでその橋渡しとなる大晦日が、転換のイメージを内包していることを確認したい。われわれが見たいのは、歳時的な年末年始のことではない。大晦日は一年の終点であり、始まりであり、到達点であり、折り返し点である。(イメージの円環)

今回の授業では、谷内六郎の「遠い除夜の鐘」と「初日の出」の絵をイメージの「発動の装置」として用いる。大晦日の(除夜の)鐘をきっかけにして、意識転換が行われ、一夜明けると、特別な一日(一年)が始まる。その結果を、子供たちは目覚めてから確認するわけだが、これは、日本古来から伝わるハレの日の始まりである。このような大晦日から正月にかけての時間軸の転換がどんなものか、およびそこに働くイメージの目的である。

(6) 指導計画(1時間扱い)

(7) 本時の目標

・大晦日から正月にかけての時間軸の転換、およびそこに働くイメージの目的

なものかを見届ける。

(8) 本時の展開 (抜粋)

○本時のねらいを知る。

・今日はみなさんに特別な日(大晦日)のことを考えてもらいます。

○絵①「遠い除夜の鐘」を見て話し合う。

・この絵の中で子どもたちはどんなことを話しているのでしょうか。

☆どんな音を聞いているのでしょうか。  
☆どんなことを思ったり考えたりしているのでしょうか。

☆あなたならどんなことを思ったり考えたりしますか。

・みんなが見つけたものについて感想を発表しましょう。

○みんなのお正月はどんなお正月でしょう。お話をしてください。

○絵②「初日の出」を見ましょう。

○どうして大晦日からお正月への時の変化を特別なものと感じるのでしょうか。

○民話「大晦日の火」のお話を聞きましょう。

(9) 評価

○特別な日(大晦日からお正月へ)の感覚を語ることができたか。

3. 授業の記録 (抜粋)

◎授業者 中川 小林 瀬底 亀山(担任)

※C「」は子どもの発言。( )は子どもたちの反応や学習活動。

(1) 授業のねらいを理解する

中川 今日だね、こういうお勉強をします。

(板書「とくべつな日を考える」)

これが今日のお勉強の大事な中心です。特別な日というと、どんな日が思いつくかな。

C (子どもたち、次々とこたえる。)  
「お正月!」「クリスマス!」「クリスマス・イヴ!」「誕生日!」「大晦日!」「節分!」「子どもの日!」「七五三。」

中川 いろんなが出た中に、今日お勉強する特別な日が入っています。今日は何日だったつけ?

C 「28日。」

中川 この31日が、さっきみんなが言ってくれた何?

C (口々に)「大晦日!」

中川 大晦日って何か特別なことあるの? 知ってる?

C 「ある!」「ボーンと鳴ったらお正月。」

中川 「ボーンと鳴ったらお正月」。すごいなあ。じゃあちよつと絵を見て考えてもら

うね。(大きくコピーした「遠い除夜の鐘」の絵を黒板に貼る。)

(2) 「遠い除夜の鐘」の絵について話し合う

中川 さあ、この絵です。この絵はいつの日のことかわかりますか? 特別な日のなかでも、いつの日かわかりますか?

C 「31日の12時。」

中川 すごいね、時間まで言ってくれたね。

じゃあ、この絵の題名を読んでみよう。

C (声をそろえて)「遠い除夜の鐘。」

中川 ここにお坊さんがいるよ。(鐘の音の響きを水面の波紋のように表している事を指しながら)それから、これは何だろう?

C 「渦巻き!」「鳴門。」

「音!」「わかった!音!」

(「音」という声がたくさん。)

「ボーン、ボーンとやって、音が、こう…(子どもたち、鐘を打つ真似をし、それから音が波紋のように広がっていく様子を体で表現している。)

中川 では、この絵を見て思ったことを書いてもらいます。(短冊形の画用紙とワークシートを子どもたちに配る。)

中川 お寺の大きな鐘が、大晦日の日に、

C 「ゴーン。」「ボーン。」

中川 そう、みんなよく知ってるね。ゴーン、ゴーンって鐘が鳴って…

百八、鳴り終わると、また特別な日が来ます。

C 「えー、そんなにうるさいよ。」

「百八だって！」

中川 その除夜の鐘が、ゴーン、ゴーン、ゴーンって聞こえてくる。そのときを頭に思い描いて、その時の事をみんなに書いてもらいます。思ったこと、何でもいいよ。書けたら、その中から一番これがいいなって思うものを一つ選んで、(短冊形の)紙に書いてください。

(書く活動開始。二十分間ほど。)

(それぞれ一生懸命考えているが、なかなか筆が進まない様子。数人の子をのぞいて、鉛筆を持ったまま考え込んでいる。)

亀山 じゃあ、聞こえたとしたら、ここにどんなものが除夜の鐘から聞こえてくるかな?それから、この二人はどんなことをお話しながら除夜の鐘を聞いているのかな?そんなことを書いてください。分かった?みんなのところにも「遠い除夜の鐘」の小さい絵を分けるからね。これをよく見て書いてね。

(それぞれ懸命に書いている。「わからない、わからない。」と繰り返して頭を抱えている子もいる。どうしても書けない子は、先生たちとお話しながら言葉を紡いでいく。自分から二枚目、三枚目を書き始め

る子もいる。)

(書き終えた子から紙を持って前にいき、黒板に貼ってもらう。)

中川 じゃあ、ちょっと黒板を見てください。こんなにくさん。二十三枚も出たよ。

ちよつと読んでいってみるね。

中川 あとでね、皆が思ってくれたこと、感じてくれたこと、何が多かったのかなって聞くからね。よく聞いてね。

・「とおくはなれていても聞こえる。」

・「じよやのかねがすこくひびいていると思いました。」

・「女の子と男の子が二人で『きれいな音だね』と言って聞いていました。」

・「女の子が、じよやのかねは一ねんでーばんい音だねと、言いました。」

・「キレイで心がおちつく、じよやのかね」「じよやのかね。ゴーンゴーン、うるさいなあ。あたらしい年だからしょうがない」

(子どもたちから笑い声が起こる)

・「たつまきは、せかいの入り口だと思っ

た。」

中川 この最後の紙、先生びっくりしちゃった。これ何だろう、なんでそう思ったの?

C 「なんか、竜巻みたいだったから……。」

中川 ああ、これが、竜巻みたいに、こういうふう

全部読んでくれる?

C 「『せかいに入りこんだみたいだな』と

思った。たつまきはせかいの入り口だと思った。お寺のかねがなって、女の子と弟はじっくり聞いている。」

中川 はあー、わかった?世界の……なんて言

言

中川 (口々に)「入り口。」

中川 入り口かと思っ

中川 「しない。」「ん……」「わかんない。」

中川 「する。」

中川 あ、する?どうしてわかるような気がする?

C 「だつて丸い。」「わかる……。」「わからないけどなんかそんなような……。」

中川 それは、どんなようなところからそう思う?

C 「だつてーだつてー、丸くなってそこから入るとね、なんかね……すごい回ってね……。」

中川 回って……。あ、こうやって回って、そこから世界の入り口に入ってくような気がする。なるほどね。まだ新しい紙があります。どんな言葉や気持ちが多かったと思

う?

C 「えつと……『聞いている。』」

中川 どんな風に聞いているのが多かった？

C 「ん〜……耳を澄ましてる。」

中川 耳を澄まして聞いている。その音が？

C 「きれいだなあ。」

中川 きれいだなあ。多いよね、ここ、ほら、「きれいだ」「いい音だ」。ほら、「一年でいちばんいい音だ」なんて言ってくれている。「きれいで心がおちつく」。それから「ゆっくりじっくり」なんてのも、聞いているんだよね。「百八なつたらいい日が来るっていいなあ、いいよねえ。」っていう風にね、言っている。ここも、遠いところから声が聞こえてきて「うれしい」。「ゴンゴンってうるさいな、でもあたらしい年だからしょうがない。」とか「いい音だなあ」とか、そういうものが書かれています。中川 (貼られた紙全体を指して) これ、いくつに分かれていますか？先生たちいくつに分けた？

C 「6」【子ども達からの発言を、時間・体感・心情・ゆめ(非現実)・思い出、事象(現実のできごと)の6つに分類する。ここでは6つに分類するだけにとどめる。】

中川 その中で、これが一番多かったね。「いい音」とかその他に「あたらしい年」なんて言葉がついてきてるね。それから、ほら「正月」なんて言葉も出てきて、「大

みそ日」なんて言葉も出てきて、「いい音だね」って言って、ここにはなんて言葉が入ってくると思う？

C 「ひびいている。」

中川 「響いている」「すごく響いています」それから「響く音だね」って。こういう言葉がいっぱい出ました。

(3)「初日の出」の絵を見ながら話し合う

中川 それでは、次に行きます。「とくべつな日を考える」第2弾です。さっきここで耳を澄ましてるとか、遠くとか言っていたけれど、この遠い除夜の鐘、これが鳴り終わると、お正月が……

C 「来る。」

中川 来る。きましたね。みんなのお正月が来るね。じゃあみんなのお正月ってどんなお正月かな？除夜の鐘、聞いたよね、その次どうする？

C 「寝る。」

中川 そして目が覚めると？

C 「明日。」

中川 何になるの？

C 「お正月。」「寅年。」「一月。」

中川 お正月……みんなのお正月って、どんなお正月なのかな？それをみんなに書いてもらいます。除夜の鐘を聞いて……寝ました……見ててよ。

(『遠い除夜の鐘』の絵を裏返しして)

中川 お正月になりました。

C 「え、お正月？」

中川 はい、じゃあ書いてみてください。 (書く活動開始。八分間ほど。)

C 「楽しいお正月」「お年玉」「鐘がなる。」「もうちょっと書いていいの？」「いっぱい書いていい？」などと言いつつ、すぐに書き始める子、ほとんど鉛筆の進む子もいる。何を書いたらよいか分からない子は、先生方に手伝ってもらいながら書いていく。

(書き終えた子は、紙を前に持ってきて、先生に黒板に貼ってもらう。)

(子どもの言葉を次々と読み上げていく。)

・「目をあけるとカーテンから光りがさしこんで、ピヨピヨととりのこえが聞こえて、ふとんからガバツとおきて、今日はお正月だ、今日一日がんばるよ。」

・「あけましておめでとう。」

・「今日はお正月だ。今年はとら年だから、元気にするぞ。」

・「朝おきたらお母さんたちにあけましておめでとうございます。したくをしてお父さんたちのしんゆうのところに行って、一年かんのことを話す。ともだちもたくさん

るから、まずあいさつをする。」

中川 この絵を描いた人、谷内六郎さん、六郎さんが書いてくれた絵があります。この人はどんなお正月の絵を描いてくれたと思いますか？

(丸めていた絵を少しずつ広げて、子どもたちに見せていく。)

中川 何が出るかな？少しずついくよ。きれいな景色なの。

C 「わかった、海が出てくるよ！」

C 「お正月、お正月！」

中川 では、この絵の題名は、何？

C 「初日の出。」

中川 ピンポン！そうなんです、六郎さんは、初日の出を書いてくれたんです。(「遠い除夜の鐘」の絵を指しながら)こちらが音だった。大晦日の音。みんなは何を書いてくれたかな？おせちとかいろいろ考えてくれました。それで(「遠い除夜の鐘」の絵を指しながら)こちらが大晦日。(「初日の出」の絵を指しながら)こちらがお正月。両方とも特別な日です。

(4) なぜ「特別」なのかを考える

中川 特別だっと思うのはどこで思いますか？いつもの日と違うのはどこで思いますか？ここが違うんだよ、こんな気持ちだから特別なんだよ、ってどこで思いますか？

か？

C (次々と手が挙がる。)

C 「一年の始まりだから。」

中川 一年の始まりだから。なるほどね。こちらは一年の終わり。こちらが始まりだから。普通の日だと、今日の次は？

C 「明日。」

中川 それは特別ですか？

C 「一月一日は一年の始まりで、十二月三十一日は一年の終わりの日だから、特別な日」

中川 一年の始まりの日と終わりの日。難しいかな？もう一押し。いつもと違う、何か気持ちが出てこないかな？

C 「気持ち？」

中川 今話してくれたのは、一年の終わりと始まりの日だから、特別な日なんだよ。とっても楽しみなんだよ。待ってたからね。そのときの気持ちはどうかな？

C 「うれしい気持ち。」

C 「楽しい気持ち。」

C 「今年もがんばるぞ。」

中川 なんてがんばるの？今年もがんばるぞ。

これを覚えておらん。「目をあけるとカーテンから光りがさしこんでピヨピヨととりのなきこえが聞こえてきて」だって。いっただってピヨピヨと鳥の鳴き声って聞こえ

ないわけじゃないよ。だけど、目を開けるとカーテンから光りが差し込んで。これだって毎日光が差し込むよ。だけど、お正月はこのカーテンの光も、ピヨピヨと鳥の鳴き声も、どんな感じ？

C 「倍。」

中川 倍になる。どうして？

C 「特別な日だから。」

中川 特別だからね。布団からガバッと起きて、今日はお正月だ。新しい気持ちになる。このように(黒板に貼られたカードを指さして)、いっぱい特別な日を考えてもらいました。

C 「もう終わり？」

中川 もう終わりなの。もつとやりたかった？

瀬底 私がね、すごく聞きたかったのは、これが竜巻みたいに見えたでしょ。竜巻がぐるぐるってなった向こうって。「新しい世界の入り口」って書いてあるんだけど、この「世界の入り口」って、向こうの世界ってどんな感じがするのかな？

C 「世界からきてるから、また新しい世界。」

瀬底 すーっと吸い込まれていくみたいな先にバン！新しい年が来る。すごいじゃない。

C 「未来。」

瀬底 だから特別なんだね。すーっと未来に行くということ。だから特別なんだね。

中川 今から、こういう特別な日が出てくる、昔からすーっと伝わってきている大晦日とお正月のお話を、みんなに聞いてもらって終わりにしたいと思います。

#### (5) 民話「大晦日の火」を聞く。

瀬底 (民話「大歳の火」改め「大晦日の火」朗読)

亀山 では、お正月がもうじき来ますね。今年のお正月はきつと、特別なお正月になると思います。

### 4. 授業後の協議会と考察

#### (1) 転換のイメージーションを子ども達から引き出すために

葛西 「かさじぞう」という昔話の中に「転換」という大きな装置というのか、イメージーションが組み込まれているということが分かったわけです。でも、亀山さんのクラスでは三学期に「かさじぞう」をやったり、また二年生ということもあるので、あの「遠い除夜の鐘」の絵を使おうということになってきたわけです。年が押し詰まって、それで終わりではない。同時に転換が起こる。行き着いたところは折り返し点で

あった。そういうイメージが働くのかどうなのかということが一番の問題点であって、谷内六郎のあの絵は、そのイメージを増幅するものとして、除夜の鐘と一緒に合わさっているわけです。まあそれが子どもたちにとってはうまく合致したと言っているのでしょうか。刺激したんだと思います。

武村 一番難しいと思うのは、大晦日からお正月にかけての大転換というものを、子どもたちに説明してしまうのではないかと、いう心配があつて、それでは、我々の授業として意味がない。どうしたらいいのだろうということ、いろいろ考えた。ただ大人でもそうだけれども、初詣とか、初日の出とか、そういうものによって時間というものを考えているし、そしてその中に日本人としての無意識の世界における、伝承されたものがあるはずだと。それを、子どもたちが言葉として出せるのか、子どもたちが言えるだろうか、そこに不安があつた。結局我々自身も、大晦日から新年に至るところの大転換を、本当のところ意識していないというか、分かっていないというか、こういう不安があるんだろうと思う。もし自分の中に、「これだー」っていうのがあるれば、これはきつと子どもたちの中にもあるはずだ、というふうにも思うんだけど、でも、そういうものが自分自身の中でも薄

らいできてしまっている。ただ、今日は二年生の授業で、子どもは子どもなりの言葉で一生懸命言おうとしている。それが何かということは意識できなかったかもしれないけれど、でも何か子どもの中の起こったというか、今は言葉にならなくても、心の中に残ったものがきつとあると思う。

宮田 確かに二年生なりの拙い言い方とか、言葉にならないとか、一見ふざけていたり、全然分らないというように見えても、分からないと言いなながらも一生懸命考えている。何か自分で自分をキャッチできないもどかしさの裏返しみたいなものがどこにあつたりね。だから、根っからふざけているわけではなかったし、で、その現れが、一生懸命考えたからこそ疲れきつて。でも、民話が始まったら、水を打ったようにしーんと静かになって、窓際の何回もしゃべっていた女の子、ずつと不安そうな顔で話を聞いていて、泣き出すんじゃないかと思うぐらいで、このお嫁さんはどうなるんだろうというように聞いていたのが、最後に「ぴかぴかの……」て言ったら、周りが「わあっ。」って言った時に、本人も力が抜けたとかね。表情を見て、書けなくても何かは揺さぶられていて、表に出るのは五年先、十年先かも知れないけれども。



## (2) 転換のイマジネーションを促す装置としての谷内六郎の絵

長浜 民話を教材にするという考え方があったり、ナマハゲなどの神様の写真を出そうとか、年末から年始にかけて神様を意識するというのがあるわけだけれど、最終的には谷内六郎の絵が決定打になったわけです。

中川 谷内六郎の絵は、円の中に感覚という時間が入り込んでいるというのがあったので、今同使えるかなって思いました。でも、民話では読解指導みたいになっちゃダメかもしれない。で、「転換」をやるには転換をはかる上で一つの装置みたいなものが欲しい。大晦日の方は、わーんと響いてくる中に羽子板が入っていたりして、これ子どもたちに言わせたい。今回も、子どもの言葉を整理していくというのが私たちの仕事で、私たちは装置を作っただけなんです。装置だけ作って、あとは、子どもたちが話をしてくれたという授業なんですよ。その装置にさえ入れてしまえば、子どもたちは口を開いてくれる。私たち以上のもを出してくれる。でも、その発言が出てこないと分類もできない。だから、板書に今回は苦しみました。どのへんに何を置こうとか、どういうふうに置いたら子どもたちが最後のまとめをしやすいだろう

かとか、言わせた言葉を、子どもにどういうふうに戻せばいいのか、変にまとめてしまうと説明になってしまっているので、そこがとても難しいと思いました。それから、かなり時間がかかったんですけども、絵を見ながら書かせたことの良さは、やっぱり子どもたちは言葉を紡ぎ出しているんだなって思っています。

宮田 今日、どれだけすんと落ちたかは分からないんだけど、何も成果主義で、今日の授業でこういうところまで知覚されなければいけないなんて、そんなことは、児童態は最初から考えていないんだから。そこまで出るかということに関しては出尽くしたと思う。

とにかく一人でも二人でも意識化できた子がいるじゃないかってね。それを拾い上げられるということが児童態の授業。たとえばかの子はついていけないけど、がんがん行けそうな子は追い詰めていくっていう、そういうことから言っても、これから先、年が改まって、この子たちがいろいろな転換をしていくんじゃないのかなって予感させてくれたような気がしています。

今日仕掛けたことが、新たな意識の枠組みみたいなもの、言葉にはできないかもしれないけれど、来年の朝起きた時に、ふつとひっくり返った(転換)かな、みたいな

ことを何かしら思ってくれただけでも、これから先全然違ってくると思う。意識が改まるというのは、ひっくり返ることなんだ、とかね。そういう意識を整える枠組みが獲得されたというか目覚めたというかね。そういう点でも、ワークシートに書くあの時間はとても大事だったんだと思う。

瀬底 除夜の鐘を暗いところで一人になって聞くんという時、やっぱりあの世からのメッセージというか、そういうものを聞きつけようとする姿勢を持っていないことなんてないと思う。

除夜の鐘のところで、聞こえないものを聞くんというあたりに、何が聞こえているのか、聞こえていると思うから。耳をすましているという時にね、それは行動ではなく精神状態よね。見えないものを見ようとしている、受け止めようとしている。現実に見えているものではなく、遠いところに眼差しを向けて何かをつかもうとしているんだって。

亀山 子どもの中に闇があるってこと。あの、大晦日の絵を見た時に、子どもたちはあれを見て怖いとかいやだとか、もう寝ているから聞きたくないというようなことは一つもなくて、いい音だとか、すてきだとか、きれいだとか、もつと聞きたいとか。

秦 子どももの時って、暗闇に注目する力と

「いか、そういうセンサーがとても強く、けれども、それは恐怖感ではないんですよ。ものすごく澄んだ怖さで、だから暗さではないんですよ。美しい怖さを見ているんだと思うんです。今は、大人になってそういう言葉に言い表せるけれども、怖いほど美しいという世界だと思う。」

宮田 上原先生に、以前肝試しの話をぶつけた時に、「怖い」というのは恐怖だと大人はそう思う、けれど、「体がこわばっている」というのかな、そういうことで考えると、オバケが出るといふ知恵をつけられちゃうから恐怖になるけれど、本当は、怖いというのは、感覚がもつとも研ぎ澄まされている状態で、異界とのアンテナの感度が最もアップしているという意味で、体がこわばっているのが怖いことなんだからその感覚に素直になれるようにすれば、決して子どもはそれを苦痛だと思わない。二年生じゃ夜更かしもしないだろうから、除夜の鐘を聞いたことがないかもしれない。でも、無意識が反映して、やっぱり先見的印象がイメージが出た。静かな夜に実際にゴーンという音を聞いたことがあるとかないとか関係なくてね。そういった世界にすっと入っちゃった子は何の迷いもなく出てきたと思う。

### (3) 児言態の目指す授業とは

小林 今日の授業は、本当に児言態らしい授業だったと思うのね。ポイントの定め方も児言態らしかったし、授業展開も児言態らしかったと思うの。教えられたことを教えられたように形にすることの方が、子どもたちは楽なのよね。生みの苦しみを経ないと、児言態の授業はできないでしょう。そこで面倒くさがってぐずっている子がいてね、それが辛いんだけど、教えるのではなくて、友達との出会いと自分との出会いがあったし。大晦日・除夜の鐘・お正月というのが、日本文化の年中行事として無理なくセッティングされているんだな。最初に中川さんが、「特別な日のことをやります。」って言った時に出てきたのが「お正月」だったんだもの。一年三六五日の中の特別な、子どもたちはちゃんとつかまえているのよ。だからといって、それは口で言うだけであって、心の中でどんなすごいことが起こっているかということも鏡に映すということではできていないのよ。まだ固まっていないどろどろしている子どもたちに、そのどろどろさを語ってもらおうという意味でびびったりだったと思うの。

瀬底 特別な日って言ったら、お正月って出てきたけれど、そこで、しめしめと思っ

宮田 子どもにとっては、自分の考えや思いを授業の中で共有できたということが、日本民族としてのスイッチにつながってくるから、そういう意味では、「みんな同じ」と考えていたんだ。」って、普段は、こういうことを取り立てて口に出して遊んだりしないと思うのね。それぞれ腹の中では思っている、

小林 授業のなかで、自分が自分に向き合う時間と、自分をお互いに出し合って、それを共有し合う時間とのバランスが必要よね。

この指導案の中で、どうしても言葉を整理したいって言った時に、時間・体感・心情・ゆめ（非現実）・思い出、事象（現実のできごと）って、さらっとできたんだけど。この「時間」があつて「体感」があつて「心情」がある。今日は、この三つが微妙に重なっているような出方をしたのよ。

中川 みんなそれぞれにお正月があつて、私自身にも私自身のお正月があるわけ。幼い頃、いつもはそんなことをしないんだけど、寝る前に大晦日の夜には、母が、全部新しいもの、パンツからズボンまで全部新しく新調したものを枕元に置いておいてくれた。そして、それがすごくうれしいのよね。ずっと我慢させられて、これは、お正月に着るんだからねって。早く着たいん

だけれども、これはお正月にとつておくんだよ。お正月に着るものは、いつも「初」のものでなきゃって。そして、わくわくした気持ちでお正月を迎えられるって。一つ寝ると全て新しいものに変わってくる。そういう感覚ってやっぱり体感なんですよ。体感を伴ってないと。体感は、やはり子どもたちにあるしね。

難波 今の子どもたちは、クリスマスと正月はつながっていると思うのね。最初に「特別な日は？」って聞いた時に、「節分」で出たでしょ。で、今の日本の子どもたちは、新暦と旧暦の両方で生きていると思うの。それが、今の子どもたちの体感だと思うの。だから、クリスマスから正月までの、あの十日間ぐらいは、今の子どもたちにとつては、とても特別な時間だと思う。そう考えた時に、大晦日から正月にかけての転換ではなくて、クリスマスから正月までの間に、子どもたちに転換があるんじゃないかなって思うの。新暦と旧暦の両方に生きている子どもたちっていうのを、もう少しつかまえないかと思う。で、ぼくは、日本人というのを捉える時に、「今」を捉えないといけないと思う。「今」の子どもたちが動いているのを何なのか捉えないといけないと思う。この国が神仏習合で生きているとかね、そういうことも

絡んでくると思う。ごちゃ混ぜでも生きていけるし、ごちゃ混ぜであるということでも生きていけるんだと思う。

亀山 このあと、二月後半から三月にやる教材で「かさこじぞう」があるんです。これは今日の授業から広げてやりたいっていう気があります。これで終わりにしてしまうともったいないから。

(元玉川学園小学部教諭)

## スナップ 再掲①

※今までの号に載せていた「スナップ」の中から選んだものです。

4歳男子……………12号

かくれんぼをする。Y男と一緒に隠れる。

お風呂場のしきものをかぶり、隠れる。

(シィー)

Y男 「クク……………」

(Y君、笑っちゃだめよ)

Y男 「クク……………」

(また、シィー)

Y男 「ぼく、笑ってないよ。笑うの、やめようと思ってもね。でも、おながが、こうねえ、ふるえるっていうか、ゆれてくるんだよ。ダメダ……………」

2年生女子……………8号

いつも、こざっぱりとはしているが、同じ洋服ばかり着てくる。そこで、担任の先生が自分の子どものお古を持ってきて、その子にあげようとしたら、

「結構です。」

ときっぱり。でも別にいやな顔もせず、ことわった。

ちなみに、その子の父親は大学教授。母親は大学講師、自宅でピアノ教授。二人ともおだやかで、教師を立ててくれる。

本人は、大人しく、人の批判などはしないが、芯はしっかりしていて、頑張り屋。

2年生男子……………9号

パチンと留める大きなクリップをいじりながら見ている子がいる。

教師 「それ、何って言うのか、知ってる？」

B男 「？」

教師 「目玉クリップって言うの。」

しばらくして、

教師 「どうしたの？」

B男 「きずついた。だって、ぼくの目玉が大きいからでしょ。」

3年生男子……………12号

(ひとりで学校内の廊下を歩いたあと、作文を書かせた。)

男子 「…………おぼけが出るといわれているトイレの横を通るとき、ぼくは妖怪よけのおまじないをしていたから、だいじょうぶでした。」